



^ 5  
4431  
2



門 八 五  
4431  
巻 2

十月廿五日共批隣出武江而暨  
義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

十月廿五日共批隣出武江而暨  
義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

いつのあしあ風のうしろむらぶら高のうしろ  
あててみし秋もり春もわたり村よこま  
笠子眠り小菫の病つねのほ世をふま  
あけしむ松母もあまのなほのあけし  
てるとらあらのうらまをを其角ハ  
はる契あつたや生ぶりのあまのある

昭和九年  
九月二十九日  
晴末

晴末

道なりおちあつる遠下境のしん  
しものいさうなるは江都の心  
るるるるるるるるるるるる  
もて追善具ののくまへ  
ひらひらひらひらひらひら  
る生ものいさうるるるる  
うけと暮月七日のゆつる  
翁仲ちの辰上へひらひらく空華

翁 水月うらさほす心流一  
ひらひらひらひらひらひら  
乃ちあるるるるるるる  
流々其神不竭今もえん  
あつる

此中よりくちらるるるる

嵐雪拜

十月廿二日夜無行

嵐雪

十月廿二日夜無行

あつたのちの一節の魚 歩む  
溢のころ二るハ五里しくまき 百里  
立ちたき見ぬる沖の船次 神叔  
あつたつち白ふ山名 祐 東潮  
ま 鶺鴒ささひし豆あひし 浮生  
蜀黍の葉をささぎし 畑中 卜宅  
舟行あつたまよて土をぬる 舟行

新川よまじい名もつちを橋のく 桐雨  
あつたあつた見し照しく 月下  
存在あつたあつた 田植を 風洗  
あつたあつたあつた 干飯 楸下  
あつたあつたあつた 咸宇  
あつたあつたあつた 牧人  
あつたあつたあつた 菖歌  
あつたあつたあつた 浪鉤  
あつたあつたあつた 東潮

山吹もくく起るとすれは 毒  
為言  
 ありあけのやうな悪きこと 後生  
 氣おのころよ時ハ 芥子 百里  
 只ありよ四十の内 樂坊を 氷花  
 あり 氣いよし 高き也守 嵐雪  
 くらひきて 穢まの 軒々のしり 神叔  
 位解のお乃 中絶 静まる 赤殿  
 赤実よ ちま切打し 送るこ 百里  
 城の 近くよ 旅うり あり 神叔

傘のわくやまのりく 傘いなる 吹雪  
 ありあけ ありあけ 母の 氣む 氷花  
 ありあけ ありあけ 煮ユル ありあけ 赤殿  
 先きのあけ ありあけ 師走 ありあけ 百里  
 ありあけ ありあけ 工心 ありあけ 赤殿  
 中山道ハ ありあけ ありあけ 嵐雪  
 一歩を ありあけ ありあけ ありあけ 百里  
 ありあけ ありあけ ありあけ ありあけ 氷花  
 ありあけ ありあけ ありあけ ありあけ 氷花  
 ありあけ ありあけ ありあけ ありあけ 氷花

せし常の侍のりらむら底緑子

満座追善各焼香

なほよくの御ちも四季の路所 百里  
凡おさちの顔ふいつ比ちるり比 氷花

悔前非

みちつちる悲しむ志違えの月 神叔  
苦しまんのかもあま塚の雪 浮生  
風のふと一何ふもや墓乃月 舟竹

居りしつれ夢のまの根の夜し 咸宇  
侍やニちとなれむ月あま 舟竹  
つね昔の心をこもる潮既 舟竹  
あまのちちをふせりさう 舟竹

芭蕉のあかきうらなはるる 舟竹  
ささきとひらり人よまつて侍る  
あまのちちをふせりさう 舟竹  
あまのちちをふせりさう 舟竹

十月廿二日 眞り

好くも多く 蕨よとつと 逆旅  
さあろろこまらりきかひひよをて

付やあひいを 業のあとおとら 桃隣

淡くゆけりよ 色此日の 子珊

面平起あひ 小松ゆやと 杉風

よごれー くるま川 幼あし 谷水

急舟いふ 飯あくる くるー くる良

どろろ 寝おの 帷子 序志

皂莢又 梅をいふ 鴉のあ 太太

ゆエ 中へ 古桶 底 亀水

心のよ 今の 住持を 憎とて 孤を

こまろろ 景の 塩原 子祐

け寒さあ くれう 雪のある 曇 利牛

あ綿の 重とく みのの せえん 白足

省く 借りあ ころきく 虫 蚊良

お雨とれ ぬの ころ 常里

やあ 平泉 ころ ころ 月 時坡

古屋下

文幅せきふく布の爲綿 太洛  
 白な陰ハ流る岸の毛 八葉  
 依のく魚の燕あつま 桃川  
 とろくやあまのちもせこもみ 利合  
 昼みはうりて昔のこいを根 磯く  
 酒を干なしくり笠玉川 文梁  
 此は名おとさして証取をい 湖松  
 晴るるくさうかふあふん 桐溪  
 家のあつまをさ小利子住 嵐変

丁寧子み批灯て送らうし 石菊  
 凡なき雪の柳地あつく ちり  
 極のまき苦鞠やうりかいた 嵐竹  
 白みよの杵のせりしあき 此筋  
 あつまへしりあ経奢る月の 素龍  
 以脚うりり中みる新 千川  
 よいくと紫はうり多ふ菊の 楚舟  
 流せし雨あつま 角蕉  
 折るたうらうらあつま 杏村



紫くし白髪の初のつる年 川鷗  
凡用くをのつるを花微笑 濁子  
香をむすんし 軽うはをら 滄波

奇仙満座普音之吟

うら心におほもなりや訪を母 杉風  
栂きやあも力もあふおわし 八素  
先ねむも栂時よあのかほはふ 子珊

見る中より中をうけん 房の松 太太  
あふらぬ新あやあれのもり 松  
菊うけく白を惜む居士衣 子祐  
山菜もを蝶の軽き栂もやえ 左治  
うた便りあ結るりあをり 序志  
葉のむを白ひも向んをり 亀水  
元送りもさうみあうら 李里  
骨肉あうゆるりあ 楚舟  
あはへて草をさるのちあ 風弦

悲しむを包みしるもあはれ 桃川  
され花をよこもえんを牡丹 牡丹  
をうけしや中庭の苔の下 馬好  
ゆきを思ふよりのし向か 用陽  
るのみが棠津うりのの枯柳 杏村  
その骸もくやのふれぬ石人 石人  
むちぬも昔の枯葉の燃きより 芳良  
あゝ色もろ繩床よりみえり 滄波  
紅梅もあはれをよこしぬ 角蕉

義仲よく送る悼

水くん夏もあつて厚川 季吟  
告をよめて死教をよしあのみ 露沾  
花あはれよと小春あはれ 山夕  
錫杖よりあはれりあはれ 直方  
泣くくも目もあはれあはれ 昭風  
あはれり櫛ハあはれ 濁子  
あはれりあはれや新 壺蛙  
あはれり白い卒都學ら 山蓬



古書

九

燈はししのるや十余ののゑ 涼葉  
 小造や中々をふまゝの凍へ 大舟  
 りくの海や十段のるひりき 九板  
 踏をみるや社のまの初歩 此筋  
 立よほと心もゆる塚のま 千川  
 力艸引切らきくはあまゝ 淵泉  
 ちやまをれ 石のん笠のまを所 文老  
 扶舊のまやけける笠の糸 卜子  
 室と菊乃咲あまゝる名あま 捲糸

表一しき菊ハ戸口よりしてける 其井  
 こや形又菴の物蓋み指の糸 海勃  
 何のののほりのゆや 桂屋 蓬山  
 五十二のゆち一馬のまらねか ちま  
 既院は家まゝも社のまを 鹿谷  
 その塚をささる拈杖のまのま 龍子  
 心ゆきを頼り凍つく月をふ 馬寛  
 風の声んや捨るもむちひらり 素就

世帯下

十月廿二日追善

湖春

亦多しやあはれ此の木の葉

一羽はひしよまゝの朝鳥 素乾

破紙 ワカ 縮まる日よ辰あふり 露沾

枝の音れり ハケ 山 浮水

新やみ 疎 けし 花 の壑 枕隣

あ 夢 のも 川 上 水

内 物 さ 人 つ 人

あ 雨 の 末 四 五 所 孤登

この形よ 我 卷 る 百合 の 巻 利牛

竈 ノト の 虫 居 る 家 と 杉風

ま 死 所 素堂

帆 筆

山 利合

盆 妙坡

膳 水

二 柳

む 杉風

酒さしをねくかやうく 利牛  
 けうもえんをお下を我の真をま 孤を  
 立くつてさしる雨のな夜 松水  
 如あの子つるけの娘も昔おれ 桃隣  
 子丸の勢のくくは 持園 利合  
 毛この粗借り返す力たすく 母坂  
 高き 少くも古名のもも 杉風  
 物事のつらさうらさるる此月 利牛  
 財布しめくみ洞よりあは 孤を

の餅の上をのりする 配り餅 松水  
 とねり毛れを旅やうめなる 枕隣  
 山くを信はの者みつくとせ 杉風  
 本の海より 兼用 母坂  
 言の本の並ひしりつ 松水  
 小あけをうけてゆく 利牛  
 ニんく 伊勢上るり乃物り 母坂  
 意り向のれ中 物をおく 松水  
 袖中今師の好はるもの枝 枕隣

まろ優美あるよりの夕昏 利合

十月廿二日

晉子亭ありて其処

今もくも雪のよを私の光る

仙化

かつたせありて瘰癧並み鴨

是吉

あみ月黒く衣衣ハ新純し

介我

掛ひのよきる 階乃くろ万 柴軍

つりもの柏イナギ控イナギをせそニや良 湖月

昼の霜の穴をくわあうく 井敷

その向も世々の隣の目をうけし 揚水

方もあはく証志ある者 秋凡

流くをせく召く 由之

雀の枝をさゆる乃あうそよ 全峯

日あふくそよ木の屑ハ泥あ行 沾徳

あふくそよもろく 李下

合羽あふよるそよ 野敷

巻

三

小侍やありていさみつて能 扱め  
 扇うゆ穢くし如月月のお 柴車  
 側のところろ白ひらきよき 仙化  
 ちのまゆ徳きと舟あまらぬ 扱め  
 ちいさよ松のうひむ例の入 李下  
 ち貝の卓もあつてまのき 燈月  
 日光梳子似あふ芳い飯 柴車  
 かこするるを忘れ 李の程 介我  
 ち朱のおくハ名やう判了 非扱

ちむとえすえ茶入袋し 扱風  
 あよキヒス 壁しお二まの緒 湖月  
 嵐のごもちを並べて惜たり 介我  
 ちを土戸めをこむ口元 治徳  
 うるもの所くをけりたり 仙化  
 生キ くら力をまを悪の入物 扱め  
 午の月あ烏帽子の乳の直ラ 李下  
 ニしめあけし並ふ虫あ 全峯  
 色もあく糸の張の小糸喰 非扱

枯葉下

つみえ 摘みまきり 由之  
肩痺のあま 宿まのよ じりん 仙化  
何一とあつ子牛 除る 介我  
常あえむ 連え 拵むの 祝め 寄 沾徳  
垣せぬ 桃を くの 教まひ 湖月

深草のあま くれ宗我 居士を 讀し  
いとすや 友風 月家 旅泊  
芭蕉のの おま じま 仙たり

旅の 旅つるの 宗我の 宿る 戸 素堂

あま くれ 人 かな 宗我の 展 北人 沾徳  
短つ 兵の ちまき くれ 宗我の 新 柳 秋風  
風子 かな けい けい せと 猿乃 面 介我  
日 ちの 色 江の 土 也 世の 縁 暮吟  
掬 笠 いた 運 ちを 破 乃 面 湖月  
風の あま けい けい の けい 柴雲  
袖 ちの ね 笠 くれ 柳の けい 暮子  
けい ちの ね 根 くれ けい けい けい 拙い  
帰 ちの 菊 ちの けい けい 翁 けい 間指



力州とりのまゝしり 乾花 山峰  
 果ちまゝさうまゝのまゝしり 芭蕉の 寒玉  
 十徳の神のまゝしりのまゝしり 秋色  
 まゝしりまゝしりまゝしり 和氷  
 白のまゝしり十徳の世のまゝしり 芝蔴  
 まゝしりまゝしりまゝしり 一雀  
 鷲のまゝしりまゝしり 是吉  
 ありまゝのまゝしりまゝしり 林也  
 雪のまゝしりまゝしり 李下

窓のまゝしりまゝしり 亀翁  
 青石のまゝしりまゝしり 横儿  
 後乃のまゝしりまゝしり 景桃  
 又もまゝしりまゝしり 萍水  
 ちりまゝしりまゝしり 野城  
 亦乃のまゝしりまゝしり 孤屋  
 油火のまゝしりまゝしり 利牛  
 丁もまゝしりまゝしり 疎雨

流れる多き也今も其の如く合 出水  
 深川よりとりつけ鳴りなるも 石葉  
 月のと能よまこちうしや本を世果 利谷  
 義教仲寺よ系も七師の傳りしと  
 四外を修んといふも隠造の志子  
 つのく一といふ所のあすけともあうぬ  
 万葉子遠里を留しかくみの塔の下  
 よらぬしよあれをまへうらむとせ

月言より候の巻や七師 批教

十一月十二日 初月忌

丸山量阿弥亭 興行

泣中々寒菊ひより耐<sup>コタ</sup>たり 嵐雪

向上躰をうきのみねは 枕隣

流<sup>ヒ</sup>空のひろるるを遅く扇をそく 岩翁

車<sup>カ</sup>りりらるる小敷の畳<sup>カケ</sup>ナリ 晋子

為賣をりよ告りあぢふは 龜翁

一筆と志のく大み字 横儿

名月みゆ糸糸の一種おひ付ケ 尺艸  
 おく安ほほと廣ふ相の糸 松翁  
 白粉の残よりくるおのゝ糸 去来  
 火燭のよりのくくく糸 正秀  
 毛谷越の山よあつとる糸 曲家  
 榎の木のつる糸海をたす糸 筆  
 吹く糸は屏風を膝に押す 撤士  
 鼓く糸はし大かりをたす 心主  
 のまをうとる糸みかふる糸 暮四

月をさす糸もて舟やひし 巨海  
 燈籠の衣鉢つくり糸 荷分  
 湯あがり糸は糸をたす 形童  
 弓をうつの糸も糸をたす 風國  
 山家の糸は帯氣糸 集加  
 獅子の座す糸も糸をたす 晋子  
 杖の糸も糸をたす 重勝  
 うらぬ糸和尔や豊田の浦糸 進登  
 塩辛桶の糸も糸をたす 撤士

雨の目ハちよもあまひしづるし 批陵  
 けこハちんぢとあるも 目嵐雪  
 のりおハ音羽の所乃下あ垂、横儿  
 ちこしちちちちちの茶綱 荷今  
 うけとの金さうしほも玉極女 去来  
 上たの聲を張く適合 尺艸  
 けのあもいさく扇のきくさるる 尺書  
 糸もすみさるる心浮曲乃目 岩翁  
 うしこある受戒の児乃白素繪 漱士

膝くしあまよ使うさなの家 音子  
 あり腰の起り物ら段の舟 集加  
 櫛子ゆきと銘の蔓 批陵  
 新ゆや着坊杯のあゝあゝ女 巨海  
 衣柄の小袖あゝあゝあゝ 風必  
 生りつる齒をゆきしああひん 音子  
 ちのま女非ハちちも雪りも 尺中  
 長旅よ持あがらるるはるる 歎言罪  
 一日 旅をわらう上る 数 心圭

きしらう女堂をたふよんむし 枕隣  
あのを藤名やめあ人(家) 岩翁  
よぶらも秀(子)柱杖とあし 横儿  
こひやとせとてあし鶏匠 巨海  
牛糸をとりしこし乃女子あ 尺巾  
あふけて碑のこむる月乳 進を  
おらむこし何ひあふららしむ 徹士  
三 年越すまの坂の揃株 花分  
肥肉ふものいもささる志のふがり 集加

枕天寒くましく川小冬 言四  
灯も国を流る光るらん 尻高  
不思議子娘をちりて 吉本  
白粥のこもる志の思ひ候 岩翁  
ゆきとあふともり小短尺 吾子  
こつと四日棧燈はくせの旅此を 妙童  
焼あう干しあま本とさう 徹士  
あまこん中流さうりこけら曹 凡あ  
あまののは華を福さうさ 集加

抄

伊勢 山ノ景 尺中

多とりの字とまの世の額 尻書

五月の月脚半もよるし膳床 桃枝

ごこととをりし蜜柑集く 巨海

かゝるの標くらげふ梅もよ 考四

くしもよる鹿もく飼猿 岩翁

おのろふ東<sup>ツキ</sup>端端のきくし 漱士

おんりのおのろふ十念 集加

産る子色もよるふ男の子 晋子



やうちりしるる新夕乃酒風也

節更ののちちとて相子あり 横儿

憐と可方よ 施茶 合する 尺中

形よりとびる 此後のく心 桃枝

岩の中りおぼる 著<sup>ナト半</sup> 考四

鬼のよみあふしと垂月の洞 心圭

くし着る花をからよる美 虎雪

花のよもあよあやく老ぶ 若兮

くし門付る垣のしん 去来

米りにもあつてぬる 帆舟 集加  
 地を建てるの 浮橋 音子  
 筆の制れしにふれ拵て 岩翁  
 ようそ運すお痛らふ 木枕 漱士  
 天井をけいふる 並に 菱鞠 尺中  
 うれ刈込の 里の 高柳 荷兮  
 水の好のぼくく ちり 八下り 横儿  
 草花をいぬる ころの 版掛 心圭  
 淡形の竹つる ちり ちり 舟 嵐雪

まろの着ると 母のセツとく 地童  
 赤きつる 痛ハ付 馬の 枕 檜 あつて 岩翁  
 ちあつと 舟を 舟 舟の 舟 風ぬ  
 あつと 赤飯くるとる 大井 辰 集加  
 おろしと あつとる 百姓の 弓 音子  
 日のこほ心 ちりある 浮橋を 漱士  
 ちり 脚の 笠子 拵と 尺中  
 ちり ちり ちり ちり ちり 心圭  
 新大橋の ちり ちり ちり ちり ちり 吉来

ふつーや切干り尾張布 荷今  
あしるる多し 舞の子 カタキ 質 重勝  
お志くち琴を悲しむ花のち 枕障  
牡丹草しよ 竹の交り 横儿

此一帖者歌落抄舎書校合変

寺町二条上町 井つら 重勝判

追加

於義仲寺六七日

惟然

花よりにせうくれそいみ、もま  
葉乃張此をねにまほし  
隔くに火新のや成とくさき  
四月廿二とてととと信と心 控芝  
月、朝子綿抱へら心 掬少くろ 昌彦



かいらに... 遊刀  
草狩り... 文州  
片巻乃觸に... 執筆  
角錐を今に... 胡故  
なかり細よ... 直患  
とや... 尼 智月  
さ... 惟然  
恵心... 正考  
前よ... 臥る

彩香に... 昌房  
茶と... 遊刀  
ら... 大州  
... 胡故  
... 真喜文  
... 魚光  
... 標芝  
... 微房  
... 川支

ありえ乃髪ふ気と分く雲 丈艸  
 照月と満老名乃隣まゝ也 乙列  
 枯れ小軍にさしる 隈さく 曲翠  
 うねくろ陽子の下乃まゝり 何 卧  
 研疥の鞘を 双云れ 人 獲葉  
 お合の終を 持る道 舟 行 北ま  
 茶の飛よとさく ぬ乃 印の是 圓何  
 立かろぬ 陰のとのれ 中 胡故  
 ことのお若くも 之味 縁ま 怪物

いまのあつとに多き 門徒さく 這華  
 かきあぬうらま 是なく 座る 朴吹  
 こつろりと 茶さく 仕也 一 老の終 曲翠  
 心くしあくく 芝乃 けく 昌房  
 肩うらし 手さく 是後 どの 竹戸  
 い悔や 脛乃 孫切く 今乃 嘉 荆口

仙満座訃音と吟

兼慶大恒

冬北陸存しこころをいれを斜嵐  
 を牡丹横小原家かけさひ文多  
 鳩消く園子女あり冬あより如凡  
 兼しし一本子離さしころ落葉の跡者  
 あり土乃墓とくぬやあそしら胡凡  
 草鞋の泣ならしや野田の鳥書逃  
 をあそり 飯よりうらまはしよ朱地  
 ありあけく氷る後や人あも遠里不  
 泣入くか減の遠人まるとか野原

冬實いれとなくころとあところ 藤葉  
 道のふれ枝ましく甲州安なま同が支出  
 清る手に併えよま墓のりまお竹官  
 ありし子候りしまをさしむけ外 裾道  
 叩石をさく位よりと歌の書 教信  
 十方ささ洞や枯る柳しけ 柯山  
 月代とまうてしき一城のあ及肩  
 しに歌をいれあまをまうし頭陀家 鳴枝

和歌

霜月十六日芭蕉翁三十九日

於蓬家仲寺真行

墓をく運乃市を指つ氷くね 桃麩

あまのくハあくる 冬乃葉の多 霜月

結んよ子孫を承る 鶴北 結つてく 正身

世自目より 略々

寺町 二条と下

井筒屋庄兵衛板

矣

